

# コロナ禍における仏教の取り組み

－海外の事例から－

安井光洋

はじめに

本稿は2020年より世界中で猛威を振るった新型コロナウイルスのパンデミック下において、海外の仏教教団および寺院がどのような取り組みを行い、また僧侶たちがコロナ禍をどのように捉えたかについて、事例を挙げながら論考することを目的としている。本稿の内容は主に4つのトピックで構成されており、まず前半の2つではそれぞれタイとブータンの仏教に焦点を当てる。そして両国で実際に行われた取り組みを例として挙げ、そこにそれぞれの国の仏教のどのような特徴が現れているかを明らかにする。3つ目のトピックではパンデミック下のスリランカで起きた、仏教に対するSNS上での批判を例として挙げつつ、日本の仏教との比較を行う。そして最後のトピックでは「コロナ禍をポジティブに捉える」という観点から僧侶たちが語った内容の中で、チベット・ネパールの僧侶と日本の僧侶の間で見られた相違について論じていく。

海外の事例に関する文献はいずれも日本語と英語で書かれたものに限定した。なお、本稿においてそれらの記述を引用する際の和訳は筆者によるものである。また海外の事例と比較する際に用いる日本の資料は『令和3年度実施真言宗智山派総合調査分析研究報告書 真言宗智山派の現状と課題』（『総合調査』）と大正大学地域構想研究所・BSR推進センター（大正大学）が4回に渡って国内の寺院に対して行った調査である。『総合調査』は、設問に対して回答者があらかじめ設定された選択肢の中から回答を選び、それぞれの回答の多寡を比較・分析するという定量調査の手法を用いたものである。もう一方の大正大学による調査は同じく各

設問に対して解答の選択肢が設けられているため、こちらについても定量調査であるが、その他に「自由記述」の項目が設けられているため、その部分に関しては定性調査としての性格が強い。本稿において引用しているのも、その自由記述の部分である。また、『総合調査』は対象を真言宗智山派に限定した調査であるが、大正大学による調査は国内のあらゆる宗派の寺院を対象として行われたものである。

## 1. タイ仏教のサンガ統治システムと積徳

まずはタイの事例から見ていこう。タイは国民のおよそ95%が仏教徒であり、その多くは上座部仏教を信仰している。中国やベトナムといった大乘仏教系の寺院も国内に存在してはいるが、寺院数の内訳は上座部のマハーニカーイ派の寺院が33,266ヶ寺、同じく上座部であるタムユットニカーイ派の寺院が2,322ヶ寺であるのに対し、大乘は中国寺院が13ヶ寺、ベトナム寺院が15ヶ寺である<sup>(1)</sup>。このことからタイでは圧倒的に上座部仏教が主流であることがわかる。

そしてタイの上座部仏教も2020年以降はパンデミックにより甚大な影響を被った。タイに限らず東南アジアの上座部仏教圏では僧侶が毎朝托鉢を行うことで知られるが、新型コロナウイルスの流行以降は僧侶たちがマスクやフェイスガードを装着しながら信者宅を托鉢して回る様子がメディアで報じられた<sup>(2)</sup>。

その一方で、タイでは僧侶がパンデミックの被害を受けた人々に対して様々なはたらきかけを行う事例も見られた。Kittawan & Sopa [2022]によればタイ全土の寺院で合計914ヶ所の「炊き出し食堂 (alms canteen)」が設けられたという。この食堂では通常の托鉢のように信者が僧侶へ食施を行うのではなく、僧侶が一般の人々に対して食料の提供を行った。そして、この炊き出し食堂は1日あたり274,000人に利用され、その予算は1日あたり10,900,000バーツ（およそ4,520万円）であった<sup>(3)</sup>。

タイの上座部寺院がこのような活動を全国的規模で行うことができた背景にはこの国独自のサンガ統治システムがある。タイの上座部にマハー

ニカーイ派とタマユットニカーイ派の2つの宗派が存在することは既に述べたが、タイ仏教にはこの両派を統べる首長がいる。この最高位の僧はサンカラート（パリー語の *saṅgha-rājan* [サンガ王] に由来）と呼ばれ、このサンカラートを筆頭として20名の長老からなるサンカラート長老会議がタイ国内の上座部寺院と僧侶を監督している。そしてその下に宗派→大管区→県管区→郡管区→行政区管区→寺院の順で組織を構成しているのである<sup>(4)</sup>。このように宗派から末端の寺院・僧侶までを統合する中央集権的システムは日本の仏教と大きく異なっている。

そして、上記の炊き出し食堂はこのサンカラート長老会議が国内の各寺院に対して、コロナ禍に喘ぐ人々を支援するよう呼びかけたことに端を発する。さらにこれを受けて国家仏教庁が国内の寺院の中から支援を行う経済的余力のある寺院を選定し、食堂が開設されるに至った<sup>(5)</sup>。

また、このような統轄機関の主導による全国規模の活動のほかに、個別の寺院が独自に行った支援活動の事例も報告されており、そこにもタイ仏教の特徴が表れている。それはバンコクに隣接したノンタブリー県にあるワット・タノード（ワットは「寺院」の意）という寺院で行われた支援活動である。その内容は寺院が支援活動に協賛するレストランを募り、そのレストランで使用できる半額クーポンを地域の住民に配布するというものである。このクーポンによって割引かれる半額分の費用負担の内訳は寺院が50%で、残りの50%（すなわち総額の25%）は当該レストランの負担となっている。そしてこのレストランによる負担分はオーナーから寺院への「積徳」と見做されるとした<sup>(6)</sup>。

積徳は「タンブン（タン *tham* は「造る」、ブン *bun* は「功德」の意）」と呼ばれ、タイ仏教における重要な実践徳目のひとつである。タンブンは自らの善行によって功德を積み、よりよい輪廻を目指すことを目的としており、これは「善因善果・悪因悪果」という初期仏教由来の思想に基づいている。具体的な例としては一般的な利他行為も含まれるが、特に重要とされているのは食事や日用品、金銭といった僧侶への布施のほか、寺院の建築・修理への協力といったサンガへの物質的援助である<sup>(7)</sup>。

本項冒頭で触れた托鉢はもっとも広く知られたタンブンであるといえる。このようにして在家信者は日常生活における仏教の実践としてタンブンをこなしている。そして前述した半額クーポンのレストラン負担分については「オーナーによるワット・タノードへのタンブン」として理解されているのである。

以上のようにタイ仏教のコロナ禍における支援活動では托鉢食堂と半額クーポンのどちらの取り組みにも同国の仏教の特徴が反映されていることがわかった。

## 2. ブータンにおけるワクチン接種の取り組みと仏教の影響

2021年4月、ブータンにおける新型コロナウイルスのワクチン接種状況の特異さがメディア<sup>8)</sup>で取り上げられ注目を浴びた。それによるとブータンの成人人口の85%が接種開始から1週間で1回目のワクチン接種を完了したという。世界各国における当時の接種状況はイスラエルとセーシェルが他国に先んじて高い接種率となっていたが、そこに至るまでイスラエルは4ヶ月、セーシェルは3ヶ月を要していた。それに対してブータンではわずか1週間で85%の接種率を達成したのである。これにより各国の接種状況を示すグラフでブータンが急激な上昇曲線を記録したため、世界的に注目される結果となった。そして、この出来事の背景には仏教が大きく関係している。

そもそもブータン国内へは2021年1月の時点ですでにインドからワクチンが届いていた。しかし、ブータン仏教の中枢寺院である中央僧院が「2021年2月14日から同3月13日までの期間は*da na*と呼ばれる不吉月であるため、それが明けるまでは接種を開始するべきではない」と政府に提言し、保健大臣がそれを聞き入れたため、接種開始がその時期まで見送られることとなった。さらに具体的な接種開始日についても、中央僧院が仏教占星術に基づき3月27日と定めた。また、この*da na*の期間があったことで、政府は計画的な接種のための準備をすることができたという<sup>9)</sup>。以上の理由から前述の結果となったのである。

ここでブータンの仏教について説明すると、ブータンは建国当初から仏教と深い関わりを持つ国である。国民の多くが信仰しているのはチベット系の仏教で、特にカギユ派の一支派であるドゥック（ドク）派が国教として制定されている。17世紀にブータンが国家として統一されてからはドゥック派による政教一体制を布いていたが、1907年に世襲王制が成立してからは国王が政治を、ドゥック派が仏教を統べるという政教二立制となった。またブータンの正式名称であるドゥック・ユー*Brug yul*は「ドゥック派の国」を意味する<sup>(10)</sup>。このことから同国における仏教の重要性を見てとることができる。

このように歴史的にも政治と仏教が分かち難く結びついているブータンであるが、ワクチン接種における仏教の影響は上記の事例だけではない。まずワクチンがブータン国内へ届いた際には政府関係者だけでなく、中央僧院の代表者もそこに立ち合い、ワクチンへ加持を行った<sup>(11)</sup>。また最初の接種対象者を選定する際には上記の接種開始日と同様、仏教占星術に基づいて検討し「申年生まれ30歳の女性」と定めた。そして、接種開始の直前にはブータン仏教の最高指導者をはじめとする高僧たちが3日間にわたり薬師如来の真言を唱え法要を行い、その様子がテレビとSNSを通じてブータン国民に向けて放送された<sup>(12)</sup>。

ブータンのワクチン接種において仏教がここまで強い影響力を及ぼす背景にはこの国における仏教の政治的位置付けが大きく関係している。ブータンの政治形態がドゥック派による政教一体制から世襲王制との政教二立制へ移行したことはすでに述べたが、その中で1986年に政府と仏教界との連絡調整期間として仏教委員会が設けられた。この委員会の役割は今枝[2013]によれば「教団の組織・運営を近代化し、国家公務員としての僧侶の待遇・厚生を検討するとともに、国の近代化政策・事業のうち、ことに社会福祉とか医療面における僧侶の積極的な役割・参加を計っている」<sup>(13)</sup>（太字筆者）とある。このように、ブータンにおいては僧侶が福祉と医療に日頃から積極的に関わっていることから、上述のワクチン接種における僧侶たちの積極的な関与もブータン政府や国民にとっ

てはごく自然なことであったと言えよう。その証左として Pelayo et al. [2022] では以下のように述べられている。

仏教の僧侶が COVID-19 への対応とワクチン接種の開始において重要な役割を果たしたことは驚くべきことではない。保健省が強調しているように、僧侶たちは常に草の根レベルでの保健活動の提唱において重要な役割を担う潜在能力を有している。(中略) ブータン人は自分たちの宗教が彼らの発展のための礎であり、社会制度、組織、生活様式、そして健康を形成する上で不可欠な要素であると考えている。<sup>(14)</sup>

このことからブータンにおいては仏教が社会規範の根幹を成すものと捉えられており、ワクチン接種においても僧侶が重要な役割を担うことが期待されていたとわかる。これを日本と比較すると、日本ではワクチン接種の開始にあたり総理大臣をはじめとする政治家と医師が様々なメディアを通じてワクチンの必要性和安全性を国民に向けてアピールしていたが、ブータンではそこに加えて僧侶によってもそれらの情報が発信される必要があったということの意味している。すなわちワクチン接種という国家事業において政治、医療、そして仏教の三者が中心となっていたということである。

### 3. スリランカの事例と SNS の陥穽

スリランカでは 2 名の有名人がそれぞれ YouTube と Facebook に動画<sup>(15)</sup> をアップロードし、その中で国内の仏教寺院に対して「(コロナ禍) 以前、寺院は人々の寄付によって生計を立てていたのに、今は寺院の中に閉じこもって、かつて寺院のために寄付してくれた人々に支援を差し伸べることをしていない」と痛烈に批判した<sup>(16)</sup>。

しかし Wanarathana & Tennakoon [2022] の調査結果によれば、実際には国内の寺院で医療機関や一般人への資金援助、マスク提供 (対象者の

信仰問わず)、食糧支援、子供たちへの教育支援、コロナ治療センターへの土地提供など様々な支援が行われていた。その中には寺院の土地250エーカーを開墾して農地として提供し、コロナ禍で職を失った人々への就労支援を行った寺院もあるという<sup>(17)</sup>。

スリランカの寺院がこれだけの支援を行いながらも、上記のような批判が生じた背景には「SNSの影響力」と「僧侶としての理念」の狭間でジレンマがある。これについてWanarathana & Tennakoon [2022]では寺院による支援事業(仏教ソーシャルワーク Buddhist Social Work)がSNSでそれほど宣伝されていないのに対し、非仏教系ソーシャルワーク団体は自分達の活動内容をSNS等で発信することを最優先とし、そこに多額の予算を注ぎ込んでいると述べられている。そして、同論ではこれにより非仏教系ソーシャルワークの活動ばかりが世間で広く認知され、それとは対照的に仏教側があたかも何の活動もしていないかのような印象が強くなったと分析している<sup>(18)</sup>。前述の批判はこのような経緯で生じたものである。そして同論ではこの現象に関して以下のような証言も紹介されている。

若者たちはソーシャルワークの活動をする時に、NGOの名前が入ったTシャツを着ながら友人たちと楽しむことを好むのです。寺院によるソーシャルワーク活動はそれほど魅力的(flashy)ではありません。後者(筆者注:寺院によるソーシャルワーク活動)はメディアも巻き込んでいません。我が国の若者たちは彼らの労働に対する対価として彼ら自身の写真と、ソーシャルワーク活動からの賃金を求めているのです<sup>(19)</sup>。

それではなぜ寺院は様々な支援活動をしながらも、それをSNSで発信しないのか。そこには偏に僧侶としての理念がある。彼らにとって今回のコロナ禍に限らず、あらゆる支援活動はdāna(漢訳は「布施」として理解されている。そしてこのdānaは「何を与えても、決してその

見返りを求めない」ということを原則としている<sup>(20)</sup>。そのため、SNSで活動を宣伝すればそれは見返りを求める行為となるし、ソーシャルワーカーへ賃金を支払えばそれもまた見返りとなり、彼らの支援活動はその瞬間に *dāna* ではなくなるのである。

先に紹介したタイのケースではレストランの半額クーポンの費用負担の内訳で、総額の25%がレストランオーナーの負担とされていたが、それが寺院への積徳となると解釈されていた。おそらくこのスリランカの仏教ソーシャルワークにおいても、従事者の行為は功徳として解釈されるものだろう。しかしながら、スリランカのケースにおいては前述のように非仏教系NGOの発信力と寺院側の寡黙さが皮肉にもコントラストを強めてしまい、寺院側が謂れのない批判を受ける結果となったのである。

それでは日本の仏教とSNSをめぐる現状はどうなっているだろうか。SNSの利用をめぐる『総合調査』でも取り上げられており、ここではSNSの利用率が前回調査（平成27年度）と比べて15.7%から42.4%と2倍以上増加していることがわかった<sup>(21)</sup>。利用率増加の背景については利用開始の動機までは尋ねていないため明確な結論を出すことはできないが、コロナ禍による影響が少なくないと推察される。

しかし、このSNSの普及は日本の仏教界において必ずしも良い影響ばかりを与えているわけではない。それを示す例として真言宗豊山派のホームページを参照すると、お知らせの欄に「インターネットなどの情報発信について」という項目があり、そこでは僧侶によるSNSでの情報発信について「本宗派にあっても、僧侶としての自覚に欠けるような表現が散見され、苦情や指摘が寄せられております。情報を発信する際には、著作権の侵害や人権擁護、公序良俗などはもちろんのこと、真言宗豊山派僧侶としての立場を十分にご理解いただき、トラブル回避を常に心がけてくださるようお願いいたします」<sup>(22)</sup>という声明が2022年6月1日付で発表されている。

このほかにも雑誌『宗教問題』の編集長である小川寛大氏は自身のSNSで「先だってあるところで聞いたんだけど、日本の坊さんがSNS

上で、おふざけ的に面白いことをやる『敷居を下げる動画』みたいなのが、しばしば海外の仏教徒SNSコミュニティ間で『何だこれは』『本当に僧侶なのか』と呆れ、物笑いの種になってることがあるらしい。引き返せないところに来ていると思う。』<sup>(23)</sup>と2022年3月26日に発信している。

以上のようにスリランカの仏教では「SNSで発信しないこと」が問題となっていたが、他方日本の仏教では「SNSで発信すること」の問題が指摘されている。

#### 4. コロナ禍をポジティブに捉える

ここまで各国の仏教におけるコロナ禍での取り組みについていくつかの例を見てきたが、それらを精査する過程で、僧侶たちの言葉の中に共通してある特徴を持つものが見られた。その特徴とは「コロナ禍を敢えてポジティブに捉える」というものである。そしてそのような事例は大正大学による日本の僧侶たちへの調査からも確認された。そこでそれらの内容を比較したところ、海外と日本の間で明確な相違が見られることがわかった。よってその例を海外と日本に分けて以下に挙げる。

##### 海外

「読書と瞑想の日常生活は難局（筆者注：コロナ禍）の影響を特に受けてはいない」<sup>(24)</sup>（ダライ・ラマ14世）

「どうぞこの機会を“自宅リトリート”<sup>(25)</sup>もしくは私のように冗談めかして“コロナウイルス隔離期間リトリート”と捉えてください」<sup>(26)</sup>  
（Jigme Losel Wangpo チベット・ニンマ派の僧侶）

「己を鍛錬し、連帯を実践する新しい方法を発見するための絶好の機会」<sup>(27)</sup>（*Melody of Dharma* チベット・サキャ派の機関誌）

「コロナ禍は私の生活や毎日行う儀礼にそれほど影響を及ぼしていない」<sup>(28)</sup>（ネパール・ルンビニの僧）

「コロナのパンデミックは私たちがリラックスし、精神的な活動に集中する機会を作ってくれたので、私たちの日常的な儀礼や活動に

支障はなかった」<sup>(29)</sup> (ネパール・ルンビニのスリランカ僧<sup>(30)</sup>)

「もともとスピリチュアルで平和を愛する私たちにとって、コロナによるロックダウンは問題とはならなかった。寺院の中で瞑想に耽る平和なひとときだった。(中略) ロックダウン中、寺院における毎日の儀礼や法要には何らの支障もなかった」<sup>(31)</sup> (ネパール・ルンビニのシンガポール僧)

## 日本

「これまで、信仰ではなく、習慣として行われてきた法要を見直す良い機会だと感じています」<sup>(32)</sup>

「改めて僧侶の生き方、修行の毎日であることを自らが実践し、その生き方そのものが人々への信頼回復に繋がるものと思う。0からの出発ともう一度自分自身を見直す機会として捉えるようにしている」<sup>(33)</sup>

「昔から行われてきた形骸化した習慣の部分を、生死の問題等仏法の本質を聴いていく本来の仏事に戻すチャンス、と考えて取り組みたい。ただ、どのような取り組みが出来るかが具体的なことを見つけるのが難しい」<sup>(34)</sup>

「法話の中で、この状況だからこそ、御開山聖人の教えを見直し、自分を見直すことをしていきましょうと話すと、多くの方がうなずきながら、同調してくださる」<sup>(35)</sup>

「コロナのことは今までの在り方を見つめ直す機会と捉えたい」<sup>(36)</sup>

「僧侶として、本来の仏教を今一度見直し深める機運だと考える」<sup>(37)</sup>

これらを比較すると、まず海外の僧侶たちはパンデミックとそれに伴う隔離生活を「瞑想に集中できる良い機会」、「儀礼や法要には影響がない」と捉える点で概ね共通している。他方、日本の僧侶たちによるコメントの中では「見直す」という言葉が目立っている。このことから僧侶たちがコロナ禍をポジティブに捉えようとする際に、海外では「自己研

鑽の機会」として捉えているのに対し、日本では「旧来のあり方を見直す機会」と捉えようとする傾向が強いことがわかる。

また海外の例の中でルンビニの僧侶たちが異口同音に「パンデミックは日常的な儀礼や法要に影響を及ぼさなかった」と変化がないことを強調しているのに対し、日本の僧侶からは「仏教や法要のあり方を見直すべき」というように変化を志向する声が上がっているという点でも対照的である。

ここで海外と日本の僧侶の間でこのような相違が生じた背景について考えてみたい。まずルンビニの僧侶たちによる「法要に影響はなかった」という声であるが、これはパンデミック下であっても法要に変化がなかったことについて彼らがポジティブに捉えていることを意味する。このことから彼らは伝統的に行われてきた儀礼や法要を継承し、それらを自分たちも変えることなく実践し続けることに意義を見出していると考えられる。そのため、もしパンデミックの影響によりそれらのあり方が変わるようなことがあればそちらの方が深刻な問題となるであろう。すなわち彼らは「儀礼や法要はパンデミックの影響を受けなかった」という言葉を通じて、「パンデミックによって仏教の価値はまったく損なわれていない」ということを伝えようとしているのである。

上記のダライ・ラマ14世をはじめとするチベット僧たちの言葉の根底にも同様のモチベーションがあると考えられる。つまり瞑想などの伝統的な仏教の実践を規矩として保つことで、たとえ世間がパンデミックの災禍によりパニックに陥ったとしても仏教の教えや、自分自身とその信仰は揺るがないということをメッセージとして伝えているのである。

次に日本について検討していこう。まず「仏教や法要のあり方を見直すべき」という声は当然のことながら現状のあり方に問題があると僧侶たちが認識していることに起因する。それでは彼らはどのような理由から現在の法要のあり方に問題があると考え、「見直すべき」としているのだろうか。それは「これまで、信仰ではなく、習慣として行われてきた法要」という言葉から分かる通り、現代の日本において執り行われて

いる様々な法要が信仰心に基づくものではなく、僧侶にとっても檀信徒にとっても単に先祖の代からの習慣として行われているという現状への憂慮からであろう。別の僧侶が用いている「形骸化」という表現も同様の問題意識から生じたものであると考えられる。

ここで重要なのは「習慣」、「形骸化」というこれらの表現が一定以上の期間の経過を前提としているという点である。すなわち、ここで指摘されている問題は必ずしもコロナ禍を要因として生じたものではなく、それ以前から日本の仏教に既に存在していた問題として僧侶たちに認識されているということである。そのためコロナ禍はその問題を前景化させるきっかけに過ぎなかったということになる。

周知の通り、現在の日本の僧侶は世襲が一般化しており、住職としての業務も曾祖父、祖父、父と継承されてきた作法を踏襲している場合が多い。また寺院としては葬儀や年回忌法要といった減罪法要や、初詣や護摩などの祈願法要を主たる業務としており、それが大きな収入源となっている。そして、その形態が僧侶の側にも檀信徒の側にも先祖代々の伝統として受け入れられてきた。しかし、そのようなあり方が今回のコロナ禍によって変更を余儀なくされ、それにより各寺院が大きな経済的打撃を被った。また、この出来事は寺院運営だけでなく、僧侶たちの精神面にも大きな影響を及ぼしたと考えられる。先祖の代から継承されてきた法務が執行困難となった今回のコロナ禍をめぐる一連の状況は、いわば伝統の断絶であり、僧侶としてのアイデンティティの喪失とも言えるものだったに違いない。

以上のような文脈で日本の僧侶たちは旧来の法要のあり方に疑問を抱き「見直すべき」と述べているものと考えられる。そのためここで「見直すべき」とされているのは法要の具体的な内容というよりも、それに臨む僧侶の目的意識や姿勢に与る部分が大きいと言える。そしてこの状況はルンビニの僧侶たちが「法要に変化はなかった」とポジティブに語っていることと真逆の結果となっている。

このことから海外の僧侶たちと日本の僧侶たちの間に見られる上記の

相違は、海外の僧侶たちがコロナ禍をポジティブに捉えることで仏教の伝統を堅守しようとしたのに対し、日本の僧侶たちはコロナ禍をポジティブに捉えることで形骸化した現代の仏教のあり方に変革をもたらすための契機を見出そうとしたことに起因すると考えられる。

## 結語

以上、ここまでコロナ禍において世界の仏教教団や寺院が行った様々な取り組みについて見てきた。仏教界全体で支援活動を行い、また寺院独自の取り組みにも挑戦したタイ仏教、政府と共に国家の一翼としてパンデミック下での重責を担ったブータン仏教、様々な支援活動を実践しつつも、僧侶としての理念に従いそれを喧伝することを是としなかったスリランカ仏教、そしてパンデミックを敢えてポジティブに捉えることで仏法護持の姿勢を示したチベット・ネパールの仏教、それぞれの活動の中に現れていたのはいずれも仏教の教えに拠り所を求めながら未曾有の難局を乗り切ろうとする僧侶たちの姿であった。

他方、日本の僧侶からは旧来のあり方を「見直すべき」との声があがっていた。それでは日本の仏教はどのように見直されるべきか。この問題について考える際に、海外の仏教で実際に行われている活動から生きた事例を学ぶことも有効な手立てであると筆者は考える。本稿において取り上げた事例がその一助となることを願って擱筆とする。

## 参考文献

Kittawan Sarai. Sopa Onopas [2022]

“Thai Sangha Response to COVID 19: A Case Study of Wat Tanod, Bang Kruai District, Nonthaburi Province, Thailand” *International Journal of Buddhist Social Work* Vol.1 pp.50-54

Kunwar, Bhim Bahadur [2021]

“Impact of COVID-19 on Pilgrimage Tourism: A Case Study of Lumbini, Nepal” *Journal of Tourism & Adventure* 4:1. pp.24-46

コロナ禍における仏教の取り組み－海外の事例から－

Ortega, Miguel Álvarez [2021]

“Global Virus, International Lamas: Tibetan Religious Leaders in the Face of the Covid-19 Crisis” *Religious Fundamentalism in the Age of Pandemic*. Transcript. pp.179-220

Pelayo, Mary Grace A. Rocha, Ian Christopher N. Jigme Yoezer [2022]

“13 Negotiating COVID-19 in Bhutan : Successfully Aligning Science, Politics, Culture, and Religion in a Unique Public Health Strategy” *Negotiating the Pandemic*. Routledge. pp.205-215

Wanarathana, Rideegama. Tennakoon, Waruni [2022]

“An Investigation into the Susceptibility of Sri Lankan Buddhist Social Work during the Covid - 19 Pandemic against Severe Public Criticisms” *International Journal of Buddhist Social Work* Vol.1 pp.5-18

今枝由郎 [2013]

『ブータン 変貌するヒマラヤ仏教王国 新装増補版』大東出版社

郷堀ヨゼフ [2022]

「コロナ禍の仏教ソーシャルワーク ―アジア仏教寺院の活動事例からポストコロナ地域政策を考える―」『日本地域政策研究』第29号 pp.128-132

真言宗智山派 [2023]

『令和3年度実施真言宗智山派総合調査分析研究報告書 真言宗智山派の現状と課題』真言宗智山派宗務庁

ソナム・キンガ 山岸伸夫訳 [2022]

「宗教とレジリエンス：コロナ禍におけるブータン中央僧団の役割」『東洋学術研究』第61巻第1号 pp.6-40

大正大学地域構想研究所・BSR推進センター

[2020] 『「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」単純集計の結果報告』

[2021] 『第2回「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」単純集計の結果報告』

[2022] 『第3回「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」単純集計の結果報告』

[2023] 『第4回「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」単純集計の結果報告』

村上忠良 [2011]

「第5章 タイの仏教世界」『新アジア仏教史04 スリランカ・東南アジア 静と動の仏教』佼成出版 pp.212-259

和田理寛 [2021]

「第四章 タイ」『東南アジア上座部仏教への招待』 風響社 pp.77-95

註

- (1) 村上 [2011] p.213
- (2) <https://www.buddhistdoor.net/news/buddhist-monks-in-thailand-use-youtube-to-make-diy-masks-and-safety-equipment/>
- (3) Kittawan & Sopa [2022] p.51
- (4) タイのサンガ組織については村上 [2011] p.226および和田 [2021] p.79参照
- (5) Kittawan & Sopa [2022] p.51
- (6) *ibid.* p.52
- (7) 村上 [2011] p.233
- (8) <https://www.economist.com/graphic-detail/2021/04/08/bhutan-vaccinated-almost-all-its-adults-against-covid-19-in-a-week>
- (9) Pelayo et al. [2022] p.211
- (10) 今枝 [2013] pp.44-51、pp.66-69
- (11) ソナム [2022] p.28
- (12) Pelayo et al. [2022] p.211
- (13) 今枝 [2013] p.72
- (14) Pelayo et al. [2022] p.212
- (15) この動画について筆者は未見。
- (16) Wanarathana & Tennakoon [2022] p.9
- (17) *ibid.* pp.10-13
- (18) *ibid.* pp.14-15
- (19) *ibid.* p.14
- (20) *ibid.* p.15
- (21) 『総合調査』 p.48
- (22) <http://www.buzan.or.jp/news/739/>
- (23) <https://x.com/grossherzigkeit/status/1507583401431166980?s=46&t=zJdwW5UA4IEU0bCyhTakmw>
- (24) Ortega [2021] p.191
- (25) リトリート *retreat* とは本来「静養」「転地療養」などを意味する語であるが、20世紀にアメリカを中心とした欧米諸国で禪が流行してからは、(主に中産階級以上のインテリ層が) 週末などに静かな場所へ集まって瞑想を行うアクティビティのことを指すようになった。
- (26) Ortega [2021] p.198

コロナ禍における仏教の取り組み－海外の事例から－

- (27) *ibid.* p.207
- (28) Kunwar [2021] p.34
- (29) *ibid.* pp.34-35
- (30) ネパール南部にあるルンビニは釈迦の生誕地とされ、仏跡の中でも最重要とされているものの一つである。また周囲にはアジアやヨーロッパなど各国の寺院が集まっている。ここに挙げた僧侶たちが「スリランカ僧」、「シンガポール僧」とあるのもそのためである。
- (31) Kunwar [2021] p.39
- (32) 大正大学 [2020] p.17
- (33) *ibid.* pp.38-39
- (34) *ibid.* p.39
- (35) 大正大学 [2021] p.19
- (36) 大正大学 [2022] p.16
- (37) 大正大学 [2023] p.29